神奈川歯科大学短期大学部紀要，3，15－22，2016

原　著

看護学生による保育園実習での健康教育の学び
― 健康教育の学習方法の改善に向けて ―（第２報）

Learning of the healthy education in the nursery shool by the nursing student (Part 2) Improvement of the learning process of the healthy education

原田　美枝子
Mieko HARADA
（神奈川歯科大学短期大学部　看護学科）

キーワード：健康教育　保育園　園児　看護学生　教員

はじめに

本学看護学科の小児看護学実習で子どもの成長・発達を理解して、健全な育成を目指してあらゆる健康段階にいる子どもと家族に対して看護を理解する目的で、医療施設と保育園・重心身障害施設で行っている。平成26年度から保育園実習期間を３日間とし、見学実習中心であった実習内容を、園児を対象とした健康教育に関する集団指導を行う（以下健康教育とする）プログラムを取り入れた。ねらいは、直接小児と触れ合って、共に生活・遊びながら健康な子どもについて理解を深め、幼児の健康増進に向けてのセルフケアができるように支援することとした。先行研究[1]から、健康教育を企画・実施することで子どもの成長・発達の特性をより理解すると同時に将来、専門職としての健康教育の必要性を理解し、健康増進に向けての支援する事の意識が高められる等多くの学びを得る事が確認できた。しかし、一方では、子どもの特性や幼児の健康教育の現状、健康教育の内容・指導方法については、学生達は短絡的にテーマを選択し実施していたことが多く、対象者に合ったものではないことが課題として示された。そこで、健康教育を行うための学習プロセスを明確にした上で、学習方法を見直していくことで本学の健康教育の改善につながると考えた。

Ⅰ．研究目的

小児看護実習の健康教育の学習プロセスと学生の学びから評価し、学習方法の見直し改善する事を目的にする。

受付日　2015年11月30日　　受理　2016年１月28日

Ⅱ．研究方法

１．研究対象

本学、小児看学実習終了した３年生　79名　小児看護学実習期間は５月～10月

２．方法

１）自己評価表

自己評価表を無記名自記式として各グループ実習の全過程終了後に学内で行った。評価項目は、「文献学習」「テーマ」「目的・目標」「構成」「内容」「媒体」「学習方法と場の設定」「幼児」「学生の態度」「達成感」の10項目と自由記載について５段階で評価し５分程度で回答できるものであった。

２）「保育園実習記録」「実習を通しての学び」の記述内容のレポートで行った。

３）分析方法

健康教育の評価得点の集計は単純集計と平均点±標準偏差を算出した。また、学生の実習記録・レポートから学生の学び内容の分析のため、記述内容に着目し、意味ある文節を取り出した。これを１つの意味を持つ文節毎に分け、各文節内容を要約し１データとした。１データに要約された内容の類似するものをまとめサブカテゴリーとして、さらにカテゴリーへと抽象化した。

３．倫理的配慮

研究にあたり、学生に評価表、実習記録と学びのレポートを使用する事について、研究目的と使用可否の判断は自由であること、記録用紙の使用承諾の有無が成績に影響しない事、プライバシー保護への配慮について説明し

協力を得た。その結果、79名からの記録の使用が許可された。

Ⅲ．保育園実習の目的・目標および健康教育の概要

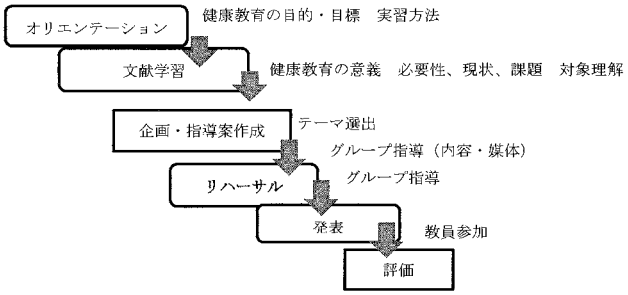
（表１）（表２）参照

１）健康教育の目標は

１．健康教育の意義や必要性を理解し、企画する。

２．保育園で健康教育を実施・評価する。

２）学習プロセス



(1)　実習前の学生指導について

実習開始前の学内では、健康教育のオリエンテーション（目的・学習方法、スケジュール、実施上留意点、実施後の評価）を行った。その後、文献学習で、幼児の健康教育の意義、健康教育の現状や問題点および課題等を学習し、テーマを抽出した。そして、実習までに、各グループで企画・指導案、媒体を作成、リハーサルは、各グループに任せた。

(2)　保育園実習について

学生はグループ２～３人が１施設３～４回に分かれ、公立保育園10か所で３日間（８：30～16：00）の実習を行っている。学生による健康教育は、担当クラス（３歳～５歳対象）に10分～15分程度実習最終日に行う。実施時間は担当保育園に一任し、健康教育テーマは、学生の希望テーマで依頼した。初日、園長・指導保育士に企画案を提出し指導者から助言等を受ける。実習中は、実施し実施後は、評価表に基づき評価を行うと共に保育園の担当者から評価を受ける。

Ⅳ．結果

小児看護学実習生、79名中64名（81%）の回収でした。公立保育園10か所で実施した。

１．健康教育の実施状況

１）テーマ・対象年齢・媒体は表４に示す。

テーマは、「手洗い・うがい」３件、「歯磨き指導」３件、「交通安全」３件、「栄養指導」３件、「早寝早起き」２件、「運動・遊ぶ」２件、「健康なうんち」２件、「熱中症予防」１件の19件であり、バライティーに富んだテーマであった。内容は、「健康に関する事」「運動・遊びの大切さ」や「道路の危険、横断歩道の正しい渡り方」等であった。ほとんどが「朝の会」で実施した保育園が多かった。対象年齢は、全年齢の１歳から６歳にわたっていた。媒体は、紙芝居が６件で多く、子どもの好きなキャラクターを登場させ興味がもてるように工夫していた。歯磨き指導は、歯の模型と歯ブラシを用いてデモストレーションを行う。指導後、自宅で歯磨き習慣が身に付くように歯磨きチエック表を渡し、幼児の意欲を高めていた。交通安全は、画用紙で歩道橋を作り、道路の危険性と正しい横断歩道の渡り方を指導しているグループもあった。手洗い・うがいはCDを用いて替え歌にし、園児と楽しく

表１．実習目的目標

目的	子どもの成長・発達を理解し、健康段階にいる子どもと家族に対しての看護が理解できる。
目標	１．健康な子どもと関わり、成長・発達が理解できる
	２．健康な子どもの日常生活を知り、援助ができる。
	３．健康な子どもに対して、健康を守るための健康教育が企画・運営ができる。
	４．地域における小児看護の役割が理解できる。

表２．実習スケジュール

	曜日	学習内容		学習内容
一	月	保育園オリエンテーション 保育に参加	二	病院実習
週	火	保育に参加	週	↓
	水	保育に参加　健康教育実施		↓
	木	重心障害施設		↓
目	金	学内　学習まとめ　演習	目	学内　学習まとめ、評価

歌いながら行っていた。手洗い後ブラックライトをあて、洗い残しを見て、再度洗い直し確認していた。昼食時にも園児は歌いながら手洗いをしていた。体操は、現在はやっている「妖怪ウオッチ体操」を幼児と共に全身の力をふり縛り、体を動かしていた。健康な食事や生活を送るためには「好き嫌いをなくす」「バナナうんちの話」、「早寝・早起きをしょう」等を行い、生活リズムの大切さを伝えていた。（表３）

２．健康教育に自己評価点

健康教育の評価得点を集計した結果、表４の通りである。学生の自己評価点（全体平均値±標準偏差値）は42.41±0.24でした。全体平均値より高い項目は、「健康教育の必要性」「導入―展開―まとめ」「幼児の参加」「参加者の発言」「幼児の反応」「学生の態度」「学生の満足感」７項目であった。評価得点が全体より低い項目は、「文献学習」「健康教育の現状把握」「テーマの選択」「目的設定」「幼児のレベルにあった内容」「媒体活用」「分かりやすい言葉使い」「声の大きさ」８項目であった。（図５）

３．記録、レポートからの学びの内容から

実習記録・レポートを分析すると「対象把握」「目的・目標」「テーマ設定」「指導案・学習内容」「媒体作成」「プレゼンテーション」「評価」７つと「グループワーク」を加えた８つのカテゴリーに集約された。表５「学生の学び」で示す

１）【対象把握】では、文献検索から〈健康課題の抽出〉〈日常生活の理解〉の２つのサブカテゴリーから構成されていた。〈健康課題の抽出〉では、「対象者の健康教育の意義や必要性から健康問題の抽出に手まどった」「幼

表３．健康教育のテーマと実施内容

テーマ	対象年齢	人数	媒体
手洗い・うがい（３Ｇ）	４歳～５歳	２０～３０人	紙芝居・ｃｄ
歯磨き（３Ｇ）	４歳～５歳	４０～５０人	歯の模型・歯ブラシを用いて、パペット人形
熱中症の予防（１Ｇ）	２歳～５歳	４０人	予防物品準備（水筒・タオル・帽子）
交通安全（３Ｇ）	３歳～５歳	２０～３０人	紙芝居、歩道の渡り方のデモ
好き嫌いをなくそう（３Ｇ）	４歳～５歳	４０人	紙芝居・ポスター
早寝早億（２Ｇ）	４歳から６歳	２０人	ポスター メダル作成
バナナうんち（２Ｇ）	４歳～５歳	２３人	うんちの模型 手作りの食育エプロン使用
運動と遊びのメリット（２Ｇ）	４歳～５歳	２５人	ポスター　体操実施 ＣＤ

表４．健康教育の自己評価平均得点

文献学習	３．８
テーマ選択	4.1
目標設定	3.9
構成	4
内容	4
媒体	3.9
実施内容	4.2
学生の発表方法	4
学生の参加度	4.5
達成感	4.3

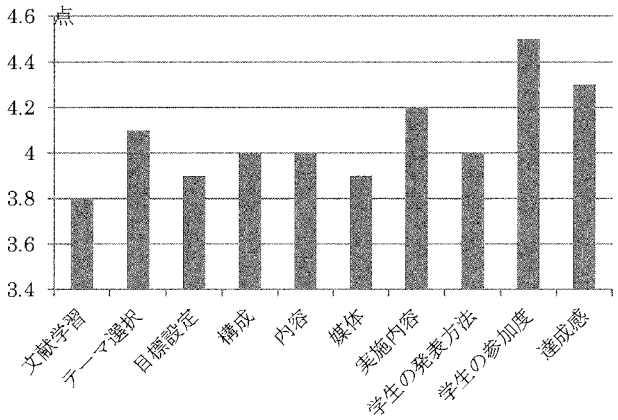


図１．健康教育の自己評価平均点

表5．学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー
対象把握	健康課題の抽出　日常生活の理解
目的・目標設定	目的・目標の意義　対象に合わせる
テーマの設定	保育園での教育の関わり　テーマの具体化　対象の立場を考える テーマの表現方法
指導案・学習内容	指導案の理解　教育方法の工夫　根拠のある教育内容
	焦点化の必要性　対象の立場を考える　分かりやすい表現方法
教育媒体	対象者に合わせる　作成技術
プレゼンテーション	技術　言葉使い　態度　正確に伝える　反応を見る 参加を促す　対象に合わせる　想定質問を準備する
評価	肯定的評価・希望・展望　自己の学習態度への反省・課題　対象に合わせた評価方法　自分の行動変容
グループワーク	肯定的協力な学び　反省・困難性

児はどの様な存在なのか、講義資料や文献をもう一度見直し理解した」「きちんと対象を理解する事が必要である」という記述がみられた。

2）【目的・目標の設定】では、〈目的・目標の意味〉〈対象に合わせる〉2つのサブカテゴリーから構成されていた。「目標がしっかり考えられると健康教育が行われる事が理解できた。」「最も伝えたいことに焦点を縛る必要性」「目標があいまいだと内容が薄くなる」。「対象に合わせる」では、「目的・目標に合わせる」という記述がみられた。

3）【テーマ設定】では、〈園での教育の関わり〉〈テーマの具体化〉〈テーマの表現方法〉〈対象の立場を考える〉の4つのサブカテゴリーで構成されていた。〈保育園の教育の関わり〉は「保育園の教育の特徴をまったく考慮せず、講義で習った事や感覚で当てはめた」「幼児の健康問題の発見」、〈テーマの具体化〉では、「すぐにできるような目標設定がよい」という記述がみられた。〈テーマの表現方法〉では、「タイトルとサブタイトルを上手に使って、幼児がいかにテーマに興味を持ってもらえようにインパクトのあるものを考える」という記述があった。

4）【指導案・学習内容】では、〈指導案の理解〉〈教育方法の工夫〉〈具体性のある内容〉〈焦点化の必要性〉〈予防の視点〉〈分かりやすい表現方法〉〈対象の立場を考える〉の7つのカテゴリーで構成されている。

〈指導案の理解〉では、「指導内容をきちんと書く事が大切」「対象者のテーマに合った指導内容である」、〈教育方法の工夫〉では、「自分が正確に伝えたい事を正確して、媒体を使用して対象者が理解できるように工夫する必要がある」〈具体性のある内容〉では、「資料を用いて的確な教育を行うことを学んだ」「根拠が不十分だと伝わりにくい」「根拠を分かりやすく伝える事は難しい」〈具体性のある内容〉では、「具体化するのに苦戦した」「具体性に欠けていた」〈焦点化の必要性〉では、「最も重要なところを絞って説明する必要がある」「肝心な部分が薄く、飛躍しすぎた」〈わかりやすい表現方法〉では「対象の年齢、発達段階を考えて表現した」「専門用語は分かりやすく表現することに苦戦した」「日常生活に取り入れてくれるように思考錯誤した」といいう記述があった。

5）【教育媒体】では、〈対象者に合わせる〉〈作成技術〉の2つのカテゴリーで構成されていた。〈対象者に合わせる〉では、「五感に訴える工夫が大切である」「興味・関心をもってもらう事が伝わりやすい」、〈作成技術〉では、「適切な媒体を選ぶことの難しさ」「文字の大きさ、色の使い方を工夫した」という記述があった。

6）【プレゼンテーション】では、〈技術〉〈言葉使い〉〈態度〉〈正確に伝える〉〈反応を見る〉〈参加を促す〉〈対象者に合わせる〉〈想定質問を準備する〉の8つのカテゴリーで構成されていた。〈技術〉では、「人に教える事の難しさを感じた」「説明が不十分で伝わりにくかった」、〈言葉使い〉では、「聞き手の事を考えず、速いスピードで話していた」「大きな声で、ゆっくりと相手の反応を見ながら話す」「集中させて、話す工夫が必要」、〈態度〉では、「明るく、笑顔で接する」「堂々とした態度で臨む事が大切である」「演技はオーバーに行う」「自分が楽しくないと対象者も楽しめない」、〈参加を促す〉では「発問の仕方やクイズ形式などの工夫が必要である」、「対象者にわかるように説明する」「対象者が参加できる工夫が必要である」、〈想定質問を準備する〉では、「あまり

難しくなく、すぐ答えられる質問」「指導内容で話した事を織り込む」などの記述があった。

7）【評価】では、〈肯定評価・希望・展望〉〈自分の学習態度への反省・課題〉〈対象に合わせた評価方法〉〈自分の行動変容〉の4つのカテゴリーで構成されていた。

〈肯定評価・希望・展望〉では、「これからも健康教育を実施していきたい」「達成感があった」「楽しく、対象者の反応がうれしかった」「皆で協力してできた事は楽しかった」、〈自分の学習態度の反省・課題〉では、「自信を持つために裏付けをしっかり学ぶことが私の課題である」「まずは自分が理解していなければ、人には伝えられない」「豊富な知識がないと援助はできない」「指導にはコミュケーション能力が必要だ」「知識不足を感じた」、〈対象に合った評価方法〉では、「評価方法も対象に合ったものを選ばなくてはならない」「評価方法が不十分であった」、〈自分の行動変容〉では、「私自身が早寝早起きをすること」「自分の生活を見直しの機会になった」などの記述があった。

8）【グループワーク】では、〈肯定的協力の学び〉〈反省・困難性〉の2つのカテゴリーができた。〈肯定的協力の学び〉」では「メンバー全員で意見を出し合いながら協力的であった」「グループ内で考えて出し合った」「チームワークが大切であった」、〈反省・困難性〉では、「グループ内でうまくまとめる事ができなかった」「リーダーに任せてしまい、非協力的であった」などの記述があった。

V．考察

1．学生の自己評価と教員の関わりについて

健康教育のテーマは、「手洗い・うがい」「歯磨き」「熱中症」「交通安全」「好き嫌いをなくそう」「早寝早起き」「バナナうんち」「運動と遊び」などで昨年と同様のテーマであった。学生の自己評価点（全体平均値±標準偏差値）は42.41±0.24で高い得点であった。

学生の自己評価の高い項目は、「幼児の健康教育の必要性」「効果的な導入・展開・まとめの流れで話せた」、「積極的な幼児の態度」「学生間の協力」「達成感があった」である。

今回、事前学習に、子どもの成長・発達に加えて、健康教育の目的、必要性、現状、課題について文献学習を取り入れ、目的・目標の設定と指導案につなげる事に時間をかけた。その結果、幼児期は健康、安全な生活に必要な生活習慣や態度を養い、心身の健康を培うためにも健康教育が必要である事を改めて理解できたと考える。さらに、指導案を導入・展開・まとめる事でスムーズに話せたと考える。幼児の興味・関心のあるテーマを選び、幼児と一緒に遊び、発問やクイズをしながら状況を把握する事や教育側が常に意識しながら幼児の反応から状況を捉え、必要時に説明を加えていく臨機応変な対応ができていた。このことは幼児の発達段階や発達課題を踏まえた働き方で、幼児の学習意欲を高める要因となり、学生の達成感に繋がったと考える。グループワークの肯定的な意見では、グループで協力して実施できたのは、これまでの実習を一緒に乗り越えてきたからこそ、頑張れたという思いで有意義であったと考える。

自己評価の低い項目は、文献検索の不十分のまま、自分たちが興味ある内容や他の教科で学習した内容を安易にテーマに選び、対象者との関連性も考慮せず、指導案は知識のみを並べたものであった。「評価可能な目標」「幼児のレベルに合った内容」については、幼児にとって必要な学習は「何か」、「何を伝えたいのか」「どんな媒体を活用すると効果的か」等健康教育の知識不足のまま実施に望んでいた状況が推測される。実施として、「分かりやすい言葉で話す」「聞こえる声の大きさ」は、できるだけ分かりやい言葉を選び、大きな声で話すつもりが、緊張して小さい声で話し、照れてしまったと考えられる。

グループの中には、実施の場面で元気な子どもを見つけ、対話しながら子どもの反応に助けられた事もあった。実施前にリハーサルをして臨んだグループと本番のみのグループとの技術の差が出たと考えられる。学生は、学内でのプレゼンテーション技術を高める機会は少なく、今後、プレゼンテーション技術を高める機会を増やす必要と事前のリハーサルを行い、効果的な教育にするように取り組む事が示唆された。媒体活用に関して、紙芝居や模型を安易に使用したが、内容に合ったものかどうかを十分検討していく教員の働きかけも必要である。文献や教材の紹介、視聴覚教材の活用や資料を提示してイメージが湧くように働きかける事も課題である。

教員の関わりは、事前に教員に指導を受けることは、具体的かつ内容も充実し、主体的に取り組めたと示唆された。一方で教員は、指導案の指導が主になり、実施はほとんどグループに任せてしまった。学生は、反省・困難さの中で「グループ内でうまくまとめる事ができなかった」「リーダーに任せてしまい、非協力的であった」と示唆された。各講義でグループワークを行っているものの、グループワークに習熟しておらず、また、実習の合間に話し合う時間も少なく、十分な時間がもてなかったと考える。その結果、グループの中には課題を残す部分もあったと考えられる。今後の対策として、グループワークの進め方、学生のレディネスも考慮しながら指導を強化していくと共に、教員の介入方法について検討する必要があると考える。全体的に健康教育の自己評価得点から見ると、概ね学生は満足したと考える。今後も学習方法を工夫して継続に取り組んでいきたいと考える。

2．講義・演習・実習について

本学の教育・指導に関する講義（演習も含む）は、基

礎看護学で指導技術（2時間)、健康カウンセリング（8時間)、母性臨床看護学（4時間)、小児臨床看護学（8時間）で合計24時間実施されている。シラバスの内容を見ると、講義内容は重複が多いことと、順序性も考慮されず、それぞれの看護範囲での内容で行われていて学習の積み上げた学習方法になっていない事が示唆された。学生のレディネスに応じた学習内容・演習も積極的に取り入れ、平行する科目を通じて学習が積み上げられるようにカリキュラムを構築し学習内容の繋がりを意図的にもたせることが重要な課題である。

実習では、初日、企画書・指導案を園長・担当の保育士に提示し、実習3日目の朝、多くの幼児の参加と保育士の協力を得て楽しく実施する事ができたと考える。実施後の保育士の評価は、「媒体の作り方よかった」「身体の構造や生理が分かった」「子ども達を参加させたのはよかった」「子どもたちは楽しんでいた」と褒めて頂き、学生の達成感につながったと考える。その反面、技術方法の工夫、準備不足、環境づくり、媒体の工夫等の指摘があり、教員はできる限り健康教育の実施日に参加し、教員の立場からの評価が必要であった。今後の課題として、担当保育園での実態を把握し、効果的な健康教育に取り組む事が必要である。

3．学びの分析から

学生の実習記録とレポートから、対象把握から健康教育実施について全カテゴリーとして抽出した。事前学習から実施・評価し、学生全員が概ね理解できた事が示唆された。小児看護における看護師の役割は、小児及び家族の健康づくりに取り組み、健康な生活が実践できるように主体的な学習支援をすることである。保育園での幼児の健康は「健康・安全な生活に必要な基本的習慣や態度を身に付け、心身の健康の基礎を培う事が重要である」とされている。つまり、保育園での健康教育は、将来の人格形成の基礎となる時期の幼児を、社会的に育てることは、「社会的に生きる子どもが必要とする健康を育成しょうとすることである。また、西村の健康には[17]「人生の最初の時期における良い教育によって下準備がなされる」と考え健康教育を重視している。保育園実習での健康教育を実践する事は幼児への成長・発達の理解はもとより、この時期に健康の必要性と指導方法を理解できた事が示唆された。学びの中には「対象に合わせて」というサブカテゴリーが抽出された。このことは、学生が健康教育を企画・実施する際に常に対象者に目を向けて、対象者主体に考えられていたことを示すと考えられる。堀川[2]らの研究では、講義・実習を通して最も多かった気づきの記述は、実施場面における言葉の表現方法や媒体の工夫など教育技術に関するものが4割、次に対象の理解が1割であったと述べているが、本研究では、野原ら[4]の研究（2010）と同じく健康教育のどのプロセスも重要である事が認知されていたことが考えられる。

健康教育の学習プロセスを丁寧に指導する事が、具体的な指導案の作成につながることを学生自身が認識できるように働きかけることが必要である。さらに、指導の留意点を明らかにするためには、健康教育の内容を企画、実施、評価の段階における分析をするとともに、総合評価し、実習場別に必要とされる指導内容を検討する事が今後の課題である。

Ⅵ．結論

本学の小児看護学実習において健康教育の実施を加え、学習内容と教員の関わりについて多くの示唆を得た。

1．健康教育の学習プロセスは、講義・演習・実習と一貫した学習の積み上げが必要である。
2．学生は、健康教育の事前学習、指導案作成、実施・評価等に主体的に取り組むことによって、学習意欲を高める事ができた。
3．学生個人の学習達成度を高めるためには、グループ指導を増やすことが有効である。
4．健康教育の指導内容を分析・評価し、実習別に必要な指導内容を検討する事が必要である。

Ⅶ．おわりに

幼時期の健康教育における看護師の役割は、子どもたちの主体的な健康に関する学習を支援する事が重点である。学生達は、健康教育を実施する事で幼児の成長・発達に合わせた具体的に健康を支援する事と子どもと支援者との関係性について学ぶことができた事と考える。

謝辞

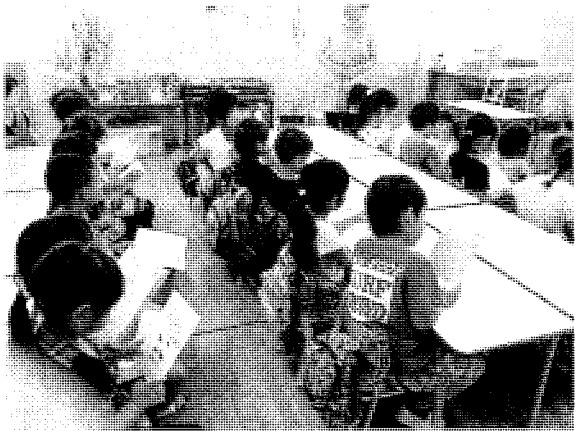
本学での新しい実習内容に協力して下さった保育園施設の皆様・子ども達、意欲的に参加してくれた学生たちにこころから感謝申し上げます。

Ⅷ．引用・参考文献

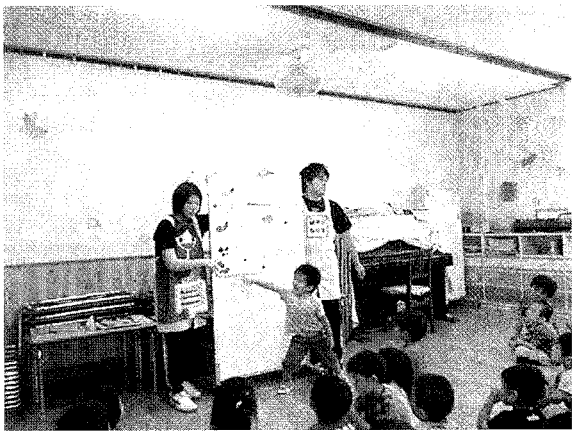
1）原田美枝子：看護学生による保育園実習での健康教育の学び、神奈川歯科大学短期大学部、第2，41－45　2015
2）堀川純子、真島由貴恵、石原逸子；「健康教育」の実施能力を育成するための教育方法の課題―産業看護実習における集団健康教育実施後の学生の意識と気づきの分析より―産業医科大学雑誌。25：341－349（2003）
3）野原真理、照沼美代子、村山雅子：大学における地域看護学の授業展開―健康教育の演習中心に　医療保険研究1巻　89－101、2010

4）矢田昭子他：保育園実習が看護学生の子ども観に及ぼす影響、島根大学医学部紀要、30，30－45　2007
5）白水美保ら他：保育園実習前後の看護学生の子どものイメージの変化、鹿児島大学医学部保健学科紀要、18、48－51　2008
6）松永美和子他：5歳向けの「自分の体を知ろう」健康教育プログラム消化系の評価、聖路加看護学紀要、33，2007
7）大久保暢子他：幼稚園・保育園年長児向けのプログラム「自分の体を知ろうに対する評価指標の検討、聖路加看護大学紀要、34，36－452008
8）佐藤公子他：保育園における幼児の効果的な手洗い指導の検討、小児看護、34（3）392－396　2011
9）石井康子他：学校実習からの学び、（第1報）岐阜県立看護大学紀要、5（1）、65－75　2005
10）石井康子：学校実習からの学び（第2報）岐阜県立看護大学紀要、7（1）、3－9　2006
11）上山和子他：対象の健康レベルの違いによる小児看護実習の学習内容の分析と構造化―病棟実習と学校保健室実習の学習内容の検討―、日本小児看護学会誌、8（2）、73－79　1993
12）飯村直子他：看護系大学における小児看護実習の概要、日本小児看護学会誌、9（1）：44－45、2000
13）北村恵子：同一テーマによる創作オペレッタ作りの教育効果、上田女子短期大学紀要26，56－74、2003
14）高橋紀美子、網野裕子：看護学生の保育園実習におけるお楽しみ会（遊びの）の学び、岡山県立大学保健福祉部紀要12（1）67－74、2005
15）白石知子、伊藤亜希子、佐久間清美、古田加代子ら「地域看護実習における健康教育の企画段階にみられる看護学生の傾向　愛知県立看護大学紀要 Vol13．25－32、2007
16）富岡晶子、篠木絵理，樋貝繁香、中久喜町子：乳幼児の健康に対する親のニーズと 健教育―認定こども園における実践から―東京医療保健大学紀要　第1号37－41　2008
17）西村美佳：幼児の健康に関する一考察　―こどもの生活秩序を作る健康教育、報告書（体躯研究所プロジェクト研究）Vol23．39－48、2004
18）宇都弘美：幼児の健康教育「―保育所の保育師に対する調査―鹿児島女子短期大学（紀要第42号　51－62　2007
19）上原和代、鈴木ミサ子、仲間富佐子、国吉ひろみ；看護学生による保育所の子どもたちへの健康教育の試み、沖縄県立大学教育実践紀要、VOL（1）8-14, 2014

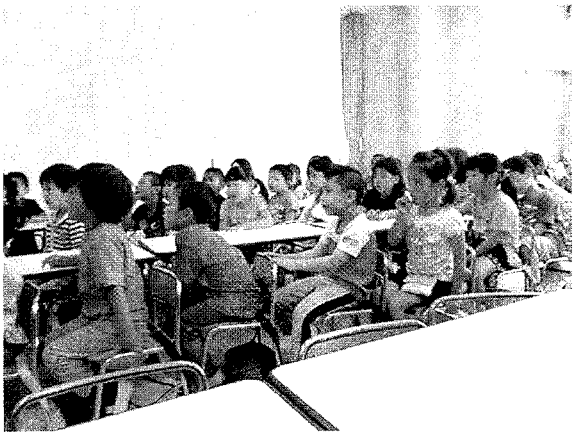
著者への連絡先：原田美枝子　横須賀市稲岡町82番地
神奈川歯科大学短期大学部看護学科
TEL：046-822-8790　FAX：046-822-8787
E-mail：harada@kdu.ac.jp



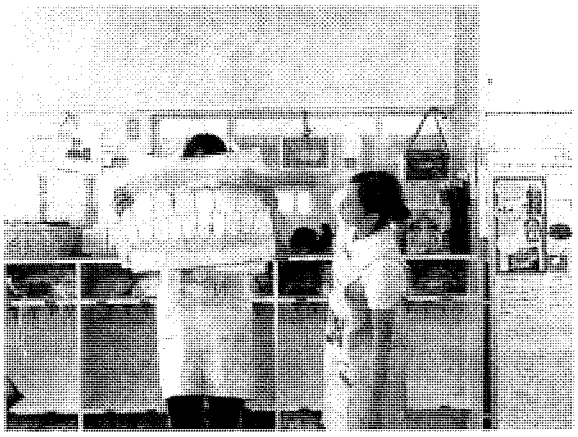
〈歯磨きチェック表の説明を聞いている園児〉



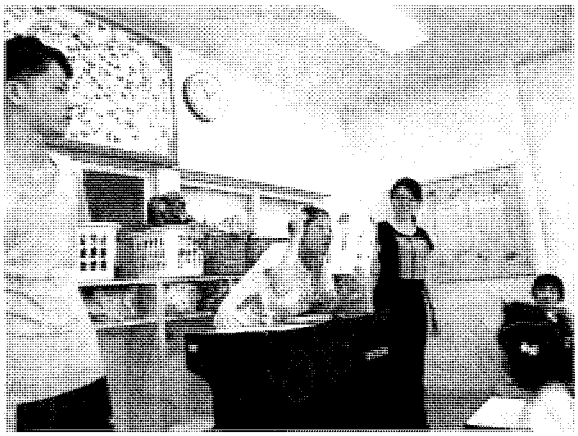
〈うんちについて説明している場面〉



〈健康教育に参加している園児〉



〈歯磨き指導をしている場面〉



〈熱中症の予防についての指導場面〉